
後ほど決めます。

國士無双

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

後ほど決めます。

【Zコード】

Z5613M

【作者名】

国士無双

【あらすじ】

闘争心溢れる一人の美少女?があつとあらゆることで争う何か。

現在、俺の目の前には、このわたあかね海鼠腸緋音いがらしこねと五十嵐五十鈴の二人が火花を散らしている。

この二人、妙に闘争意識が強く、毎日のように喧嘩をしている。

「今日は何の用ですか？」

「あんたを屈服させるために決闘を申し込みに来たのよ！」

緋音が、ダンツー！と机に果し状を叩きつけた。

果し状つて… いつの時代だよ。

それよりも、決闘つて何だよ。

「詳しい内容はその果し状に書いてあるわ！直樹！あんた立会人しなさい！」

「はあ？ 何で俺なんだよ。ていうか、立会人なんて必要ないだろ？」

「今回は公平公正を貫くために立会人を必要とするのよ。それに、審査員も兼ねてるしね。立会人兼審査員よ！」

「なんでそんな面倒なことを…」

「やるわよねえ？」

「やるわけないだろ。誰か別の人にな…」

「や・る・わ・よ・ね・え・？」

「……はい」

緋音には頭が上がらない。
色々あつてな…。

「でも、なんで審査員や立会人が必要なんだ？」

「それは秘密。放課後、教室に残つといでね」

「は、はあ…」

何をやらかすつもりだ？

警察沙汰にはしたくないぜ？

*

*

「じゃじゃーん! 第一回、どっちが美味しい作れるかな? 料理対決
!」

「ふふふ、私が勝つて、あなたの目障りなその鼻を折つてさしあげ
ましょー!」

お、おーい。何でそんなに乗り気なんだい?
僕には意味が分からぬよ。

「何でお料理会に立会人が必要なんだよ。審査員は分かるとして
「お料理会? そんな甘っちょろいもんじゃないわよー!」
き肉踊る壮絶な戦いが始まるんだから!」

「それ、喜んでるじゃねーか! ねえ、五十鈴さんはおかしいと思わ
ないの! ?」

「いい機会ですの! 」この醜い女狐に完勝して、酒池肉林の地位を築
いてやりますわ!」

「度胸だけは認めてあげるけど、その生意気な態度が裏田に出ない
よつに気をつけないとね!」

「……直樹君、始めてくださるかしら?」
ふ、震えていらっしゃる…
瘤に障つたか?

まあ、触らぬ神に祟りなしだ。

スルーしよう。

「じゃあ、スタートで!」

「……ちょっと」

「何だよ」

「そんな適当なスタートが存在するとでも思つてるわけ? ちゃんと
真面目に言いなさいよ!」

「こんな学校の一角で羞恥心と戦つてたまるか!」
「いいから言え! バカヤロウが!」

「三一イドン!」

はあ…

なんでこんなに疲れてんだ?

俺は巻き込まれただけなのにな…

あ、でも味見はできるよな。

舌と出るか凶と出るか…

この一人の腕次第だな。

ここは審査員っぽく、聞きに回つてみるか。

「えー、緋音さん。何を作りうとしているんですか?」

「っさい!喋んな!気が散る!..」

「あ、はい。すいません…」

集中するとキャラ変わるんだな。

一応、五十鈴さんにも聞いておくか。

「じゃあ五十鈴さん。あなたは何を?」

「私は庶民的なステーキを。どうせあなたがたべるのでしょうか?それならば庶民的なものがよろしいかとおもいまして…くそ、大分落ち着いているが、こいつ、うだ。

俺、何かしたか?

「あ!ステーキとか、私とかぶるじゃん!」

「これは失礼しましたわ。ではあなたはサイコロステーキにしたらどうですか?中まで火が通つてないといけませんから」

「いい!これで勝負する!」

「では、集中しましょうか」

…これから20分間、俺は突つ立つていた。
椅子が無かつたから。

「よし!完成!」

「私もできましたわ」

「な、長かった…」

疲れた…

太陽はとつぐの前に傾いている。

「じゃあ直樹、食べ比べてみる。あ、誰がどれを作ったかは言わないから」

「面倒臭いなあ。じゃ、一いつかわ

はむ…

外は焦げてて、中は生焼け。

こいつは多分、緋音だな？

五十鈴さんの注意を聞かなかつたのか？

結論としては、不味い。

次は五十鈴さんのやつか…

正直不安だな…

ぱく…

美味い。

一口齧つた途端、中から溢れんばかりの肉汁が。

一流料理店並の美味さだ。

「ああ、どうだつた？」

「……正直、天と地の差だ」「

「そんなに差がひらいたの？」

「ああ。じゃあ、発表する。勝者は……一いつかだ！」

俺は迷わず後者を選んだ。

ふふ、残念だつたな緋音。これでお前の時代はもう…

「やつた！私の勝ちだ！やつた！」

「まさか、この私が…」「

しきつたあああ！

やつちまつた！

もう戻れない…

終わつた…

「よし、直樹。今日は気分がいいから一緒に帰つてあげる」

「何だよ、薮から棒に」

「何よ、嬉しくないの？」

「嬉しくない」

「し、正直すぎるよー。」

「だつてお前、毎回俺を振り回してばっかじゃん！」

「いいからーついてきなさこよ」

「えー、面倒くさい」

「いいから」

「はいはい、分かりましたよ」

もつ学習しましたよ。

「じゃ、帰りましょウ。」

あーあ、疲れた。

「あれ？五十鈴さんは？」

「負けた方は片付けつて果し状に書いといたの。正解だつたわ

「……」

恐ろしいよ。

「帰つたら何しようかな？」

「……」

謝れ、俺に。

「ふああ…」

「昨日はよく眠れなかつた。
深夜、緋音から

「明日、朝早く学校に来て。やりたいことがあるから
という内容のメールがきた。
しかも見てくれ。

「125通も来てやがる。
ボタン連打でもしたのか？」

「……もう来てやがる。つて校門開いてねえじやねえか
「あ、遅い！何分待つたと思ってるの！？」
「…予定集合時刻よりは10分早いんだけど
「いいから素直に謝れ！」
「懽悦至極です！」

キャラ代わり早えよ。

「こちとら寝起きで頭が回んねえんだよ。

「で、何をするためにそんなに早く来させたんだよ」

「それは…じゃーん！『学校を占拠しちゃおう』大作戦！」

「その熱意はどこか別の所に回せないのか」

「今現在、この学校の勢力は大きく分けて二つ…」

「五十嵐五十鈴派と海鼠腸緋音派の二つな」

「そう！だからその邪魔な五十嵐勢力を粉碎するためにあんたには
協力してもらうから」

「あー、またそういうカンジの？」

「またつて何よ。今度は今までとは規模が違うの。放送室を占領し

たりもするわ

「……教育委員会に訴えられないようにな」

*

*

「一ひら五十鈴！これから私と競争しなさい！」

「内容を教えて下さらないかしら？」

「勝負内容は簡単。学校中から下僕を何人集められるかを競うの！」

「…いいですわ。受けて立ちましょ！」

…面倒くせ。

「拓馬、お前はどうちにつくんだ？」

「ん、五十鈴さんかな？緋音は小さい頃から見てるから、見飽きたっていうか…」

「そうか、いいな。俺は強制的に緋音一派だよ」

「…大変そう。頑張つてね」

「ああ、お前もな。五十鈴さんはああみえてだから」

「ええ！初耳だよ！」

「じゃあな」

「ちょっと一変なこと言わないで！」

…疲れそうだな。

うしろで「Ah～！Oh・my gat！」とか言ってるバカは放つておいて、何をするんだ？

「なあ緋音。これから何をするんだ？」

「授業は全部サボる！作戦会議よ！」

…単位それないと、進路は真っ暗だよ？

*

*

あれから、作戦会議に参加するメンバーを集めて回ったのだが、10人も集まってしまった。

どう捌くのだろうか。

「じやあまずは具体的な活動内容から。アイデアは無い？」

1

「はーーー！」

「そこの『テバ』」

「とにかく派手な恰好をして全学年の教室前廊下を練り歩くのがいいと思います！」

「出でいけ」

……結局 そうなるよな。

その後、同じような手順で連蓮の如く仕分けていった。

二十分後、

「一人になつたわね……」

……予想通りだ。

でも決して嬉しくなんかないね。

理由？

最終的に俺が考えることになるからだよ。

そろそろ振られるはずだ。

「ねえ……なんか案ない？」

ほら。

「勝負は放課後なんだろう？じゃあ 部活中の奴等に聞いていきやいい

じやん

「じゃあ もう、それでいいや……」

……多分飽きたな。

俺の気持ちも考えててくれよ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5613m/>

後ほど決めます。

2010年10月9日16時22分発行